

幼稚園生活が幼兒に與ふる弊害の一方面

東京女子高等師範學校
附屬幼稚園主事

安井哲

家庭に於ける幼兒の自發的生活に特別の設備と計畫とを與へようと企てたものが、一口に云へば幼稚園となつたのであります。そこで、この計畫があまり成人の見地からのみ爲される時には、幼兒の生活には、反つて不適當となることがありますので、吾々幼稚園教育に關係するものは深く注意せねばならぬと思ひます。或種の幼稚園はこの點に於て、幼兒の生活を反つて非活動的に導きはせぬかといふ懸念を懷かせないでもありません。

幼兒は自發的活動の最も盛なるものであることは、少しく幼兒に接したものは皆經驗的に之を知つて居ります、従つて幼稚園の教育に於て、この自發性を最も尊重せねばならぬといふことは一般に認められて居るのであります。併し如何にせば

徹底的にこの性を發揮せしめ得るであらうかといふことは、充分の考慮を要することであらうと考へます。

假りに幼兒の幼稚園生活の一日を想像して見ますに、唱歌を習ひ、「鳩ぼつぽ」や「蝶々」の遊戯をする、或は豆細工や粘土細工や畫き方をします。是等は皆幼兒の好むものには違ひありませんが、併し若し十分乃至三十分の間、自分の知らぬ唱歌を教へて頂いたり、友達と一緒に先生の指導の下に「蝶々」や「鳩ぼつぽ」をして遊んだり、又は先生と一緒に一定の場所で、粘土を材料にして、船や茶碗を拵へたとて、この間に自分の精神や身體を最も自由に活動させた範圍はどれほどでありませう、勿論この時間外に戸外で自由に活動

することはありませうが。

何等特別の設備も計畫もない家庭では、幼児は手あたり次第にその身邊の器物をもてあそんで所謂いたづらをやります。机の上にある鉛筆で書物に濫塗をやつて、父親を困らせたり、針箱から母の鋏を持ち出して大事な布片を切つて母親を泣かせることもありませう。その外手あたり次第に目に觸れるものを持つて來ては「これは何」「これは何にするの」と疑問の連發も致しませう。そこで母親がその全力を幼児に注ぎ得ぬために、書物の代りに畫用紙を準備して置きなかつたり、布片の代りに紙を備へて置きぬといふ手ぬかりがあつても、或は又忙しい母親から一々の質問に對して解答を與へられないといふ不満があつても幼児自身から云ふならば、何の拘束もなく、自分の思ふままに鉛筆や鋏の使用を試み、新奇なものに自由に觸れ得るので、これが爲めに父母より叱られることさへなければ、彼等自身は大なる満足を味ひ得

るのでありませう。

幼稚園及び家庭に於ける幼児の生活を比較して見ますと、私は何うしても、茲に一種の感じを起さざるを得ぬのであります。幼稚園は家庭に於ける母の不準備に對して、充分なる計畫を爲さんと企てるのでありますが、例へば鋏を與ふる場合や鉛筆を與ふる場合には、常に一定の品を與へます、粘土を與ふる場合にも、常に一定の分量を與へます。即ち主として成人の見地から考慮されたもののみを與へるのであります。斯くて幼児はその活動を、與られた範圍外に及ぼすといふことが出来なくなりませう。故にその保母の考案の範圍が狭ければ狭いほど、幼児の經驗は狭くなつて、幼児は常に出來合の材料を貰ふに止まるのであります。

實驗に依りますと、粘土細工を保育室内でさせる場合と庭園でさせる場合とは、假令どちらも自由に製作せしめるとしても、その成績に非常な違があることを發見します。即ち室内では幼児

の精神を刺戟する材料に限りがあり、且又教師が選擇して與ふる物にも限りがありますが、戸外に於ては、草でも木の實でも小石でも枯枝でも、その目に觸れるものは悉く幼児の注意を惹きますので、幼児はその興味に従つて、製作せんとするものを自由に選擇するのみならず、その製作物中に、種々の材料を採用するのであります。例へば自分の好きな草花が其處に咲いて居るために、粘土で花瓶を造らんと考へ、これにその花を摘んで、實際に挿入したり。或は虎や獅子を造つて、小石を眼に用ゐたりするやうに、幼児は自身で保母が想像する以外に多くの應用を見出すのであります。これを僅に一枚か二枚の草や木の葉を摘み來つて粘土に型を押させるのに比して、その選擇範圍の擴大に非常な違ひがあるのであります。加之、この場合に於ては有目的の作業をなす機會が自然多くなるのであります。

それから又成人本位に計畫された指導のみを受

くる幼児は時とすると受動的の心狀を保持するやうになつて、その周圍の事物に疑問を懷くといふ所謂學習的若しくは研究的の態度（幼兒には不適當な言葉ではありませんが）を失ふやうになります。即ち保母は常に自ら考へた話を聞かせ、自ら工夫した手工を授け、又幼兒の目撃するものに對して自分の知つて居る智識を授けるといふ風では、幼兒は常に受動的に保母の話すことを聞き、教ふる所を習ふといふ状態にのみ居るのであります。この状態が三年間も幼稚園に於て繼續されれば、小學校に行くやうになつても、或は自分の頭を活かして學習するといふ習慣がなくなつて、教師が授けねば常に非活動的精神状態を保持するといふやうになる憂ひがなくはあるまいかと思はれます。以上は幼稚園が、家庭の不準備と無計畫なる點を補はんとして、あまり成人の見地のみより考案し過ぎたる結果を想像したのであります。そこで幼稚園の仕事は幼兒の實際生活を能く觀察して、

なるべくそれを豊富にせんが爲めに、幼児自身をして種々なる経験をなさしむるやうに努むることであると思ひます。即ち幼児の生活をして充實せしむるには如何なる材料を供給すべきかを工夫するのが保姆の最大切な仕事であつて、その材料の使用は主として幼児自身が試みねばならぬのであります、一例を擧げて之を説明しますれば、幼児は動物を愛するものであるから、動物園參觀の便のある場所ではこれを見物させます、又種々の動物の玩具を興へるといふ時には、幼児は積み方や粘土細工や又は豆細工等をする場合に於ても、その動物の玩具を材料として、動物園の實際を發表するのであります、即ち積木や豆細工で動物園の建物を造り、その中に玩具の動物や粘土で作つた動物を入れ、遂には紙片を切つて切符を作り、保姆や友達を招いて動物園の見物をさせるのであります。

以上のやうな幾何かの玩具が幼児の精神を刺戟して、これが曾て経験した動物園を造ることゝなり、動物園が出来たので、それを參觀するといふ遊

戯に進んで来たといふことは實に面白いことではありませんか。茲に幼児の生活は實に充實した自發的な、満足なものとなるのであります。これを保姆が斷片的に粘土細工の時間に象を作らせたり、豆細工の時間に飛行機を作らせたり、或ひは積方で字を作つて、それ限りであると云ふのに比べれば非常に有意義なるものであると思ふのであります。

以上申したいだけでは、充分に私の申さんとする意味を明かにすることが出来なかつたかも知れませんが、要するに幼稚園が成人の立場からのみ考案した出来合の智識を幼児に與へ、幼児をして常に受動的の生活にのみ馴れしめて、不知不識自發性を損害するやうなことの無いやうに注意したいと云ふことゝ、もう一つ、自發的の生活を尊重すると云ふことは決して何等活動の刺戟のない場所に放任して置くといふのではなく、如何なるものが幼児に對して最價値あり、興味ある刺戟材料であるかと云ふことを幼児の實際生活の觀察より推して、充分に研究せねばならぬといふのであります。